

小さな違和感が教えてくれたこと

岐阜市立精華中学校 3年

加藤 優菜

「ジェンダー平等を実現しよう」というフレーズを耳にしたことはあるだろうか。これは、国連サミットにて定められたSDGsの五つ目の目標である。2026年6月に発表された「ジェンダー・ギャップ指数2025」によると、日本の総合順位は148か国中118位、G7の中では最下位という結果である。私には、この数字が日本でなかなかジェンダー平等が実現されないことを象徴しているように見えた。

そんな日本で暮らす、私の主張。それは、「ジェンダー平等は遠い世界の話ではなくて僕らの日常の中にある」ということだ。この主張をしようと思ったきっかけは身近な所にあった。ほんの数週間前の話だ。ある日の掃除の時間、教室に帰ってくると机を運ぶ作業が終わっておらず、自分は無意識に近くににあった机を運ぼうとした。すると、仲の良い子が私に笑いかけた。

「そういうのは男子に任せとけばいいよ。」

その何気ない彼女の一言が、鋭い刃のように私の心に深く突き刺さった。ほんの一瞬、時間が止まったように感じた。たった二秒ほどの時間で、その言葉を反芻するように何度も何度も脳内を駆け巡る。そうして私の口から出た言葉が、

「うん、そうだね。」

だった。私は彼女の発言に感じた違和感を聞かなかったことのように、微笑み返すことしかできなかった。

おそらく私が違和感を感じた原因は単純で自分だってある程度は力仕事ができるのに、なぜその機会を性別で奪ってしまうのかという純粋な疑問。そして、机を運んでくれる人への申し訳なさだったのだろう。机を運ぶくらい、多くの人が経験したはずだ。その時に「机を運ぶのは男子の仕事です」と教わることはあっただろうか。なのはどうして私たちは無意識に、性別で当たり前のように「性別の役割」というものを決めつけてきたのだろう。まるで社会の常識のように。

最近、学校でも多様性が話題に上がるようになってきた。同時によく聞く言葉がある。「多様性を認めてあげよう」はつきり言って、私はこの言葉が嫌いだ。「認めてあげよう」って、何。日本国憲法第十四条。すべての国民は法の下に平等である。「認める」という言葉は、「自ら判断して受け入れる」の他に「見てよしとする。かまわないとして許す。承知する。」という意味をもつ。本当に平等ならば、誰かが誰かを「認めてあげる」なんて言葉を使わなくて良いのではないか。そこに差別が存在していないか。あの時、彼女に向かって違和感を伝えたり実際「机を運ぶことに男子も女子もないよ。」と口に出したりできなかったのは、私の弱さだ。だからこそ、いつか性別で役割を決めつける空気がなくなるように、日常の違和感を見逃さない自分でありたい。声を出せる自分を作り上げたいと心から思う。さらに、学校で学んでいる「LGBTQ」についても考えてみた。今やその該当者は13人に一人と言われている。ざっくりクラスに3人はいるということだ。とても身近なことだと感じさせられる。他人事ではない課題だ。すでに嫌な思いをしている仲間がいるのかもしれない。

これからの社会を担う同じ中学生の仲間に伝えたい。私たちが本当の平等を実現するためには、「日常の常識を疑うことだ」と。これはジェンダーに限った話ではない。私達の日常には、人を傷つけてしまう「地雷原」のような言葉が無数に存在している。笑顔の裏に苦しみは隠れていないか、当たり前と思っていることで、排除されている仲間がいないか。まずは相手の立場に立って本当の姿、心の声を聴こうとすることから始めなくてはいけなと。自分の意識次第で、その「地雷原」を少しずつ取り除くことはできる。

「私にとっての当たり前、あなたにとっての当たり前、それは本当に真実なのか？」

多様性を認め合うことを目指す現代。私たちの意識と行動が未来を変える力になると信じている。そんな仲間でありたいと願っている。